

# 香 川 県

(香川県農政水産部農業経営課 香川綾香)

## 1. 新病害虫の発生

### (1) ヨコバイ科の一種 (和名なし) (*Singaporea shinshana*) (令和2年12月24日特殊報)

令和2年8月～10月にかけて、モモ、スモモ、ウメ、アンズ、オウトウ、ハナモモ及びハナウメの葉を加害するヨコバイ類が県下4市2町で確認された。採集した個体について、九州大学大学院農学研究院 大原直通氏および神戸植物防疫所に同定を依頼した結果、本県未発生のヨコバイ科の一種 (和名なし) の *Singaporea shinshana* であることが確認された。

### (2) クロネハイイロヒメハマキ (令和3年1月28日特殊報)

令和2年8月に香川県農業試験場小豆オリーブ研究所内のオリーブにおいて、新梢の葉を綴って食害しているハマキムシの羽化成虫について神戸植物防疫所に同定を依頼した結果、クロネハイイロヒメハマキであることが確認された。本種は、国内に広く分布しているが、オリーブへの寄生の報告は国内初と考えられる。同年9月～10月に県内の経済栽培園地や街路樹などのオリーブを加害しているハマキムシ類を調査したが、本種の寄生は確認できなかった。

### (3) オリーブ・キタネグサレセンチュウ、ラセンチュウ (令和3年11月19日特殊報)

令和3年6月下旬に土庄町のオリーブ栽培園地において、立枯病に罹病した樹の根圏土壌について、ベルマン漏斗法でセンチュウの分離を行ったところ、根及び土壌からネグサレセンチュウとラセンセンチュウが確認された。このうち、ネグサレセンチュウの同定を龍谷大学農学部・岩堀英晶教授に依頼した結果、キタネグサレセンチュウであることが確認された。オリーブへの本種の寄生の報告は国内初と考えられる。

### (4) ネギハモグリバエB系統 (令和3年12月7日特殊報)

令和3年10月に中讃及び西讃地域のネギ栽培ほ場において、ハモグリバエ類による白化症状が

確認された。被害状況が従来のネギハモグリバエ類と異なり、他都府県で発生が認められているネギハモグリバエ別系統による食害と類似していたため、採取虫を、農業・食品産業技術総合研究機構野菜花き研究部門に遺伝子解析を依頼したところ、本県で初確認となるネギハモグリバエB系統と同定された。

## 2. 水稲

### (1) いもち病

早短期水稲では、穂いもちの発生は認められなかった。

普通期水稲では、葉いもちは平年よりも早い時期に発生が認められ、8月上中旬は発生ほ場率が90.9%、被害株率が29.7%と、発生量はやや多かった。穂いもちは9月の発生ほ場率が72.7%と高く、発病穂率は0.7%と平年並であり、発生量はやや多かった。

### (2) 紋枯病

早短期水稲では、例年よりもやや遅く8月上中旬に発生が認められた。8月上中旬の発生ほ場率は38.9%と平年並で、発病株率は6.9%と平年よりもやや少なく、発生量は平年並であった。

普通期水稲では、7月下旬に発生が認められた。9月中旬の発生ほ場率は59.1%と平年よりやや高く、被害株率が25.8%と平年並、発生量は平年並であった。

### (3) セジロウンカ

予察灯では7月第1半旬に誘殺が認められた。誘殺時期はおおむね平年並であった。誘殺数は、7月は平年よりやや少なかったが、8月は平年並、9月は平年より多く推移した。

早短期水稲のほ場では、6月上中旬に発生が認められ、発生量は全般的に平年並からやや多く推移した。

普通期水稲のほ場では平年と同様に7月下旬に発生が認められ、発生量は平年並であった。

### (4) トビイロウンカ

予察灯では8月第3半旬に誘殺が認められた。誘殺時期はおおむね平年並、誘殺数は、7～8月は平年並であったが、9月以降は平年よりやや少なく

推移した。

早期水稲、普通期水稲ともにほ場での発生は認められなかった。

#### (5) ツマグロヨコバイ

予察灯では5月第6半旬に誘殺が認められた。5月以降の誘殺数は全般的に平年より低く推移した。

早期水稲ほ場での発生量は平年よりやや少なく推移した。普通期水稲ほ場での発生量は平年並であった。

#### (6) 斑点米カメムシ類

予察灯では、クモヘリカメムシおよびホソハリカメムシ、ミナミアオカメムシがおおよそ平年並、アカヒゲホソミドリカスミカメは平年よりやや多く推移した。水稲ほ場での発生は早短期水稲でのほ場は平年よりやや少なかった。普通期水稲のほ場では平年並であった。

#### (7) コブノメイガ

予察灯では誘殺が認められなかった。

早期水稲では、8月上中旬の発生ほ場率5.6%、発生株率は0.1%と平年並であった。

早短期水稲では8月上中旬に発生が認められ、8月上中旬の発生ほ場率は45.5%、発生株率は0.1%と平年並であった。普通期水稲では8月上中旬に発生が認められ、8月上中旬の発生ほ場率は45.5%、発生株率は0.4%で発生量は平年よりやや少なかった。

#### (8) その他病害

縞葉枯病は、早短期水稲では、7月上中旬から発生が認められた。7月下旬の発生ほ場率は50.0%と平年並、発病株率は1.3%と平年より低く、発生量は平年並であった。普通期水稲では、平年よりやや遅い7月下旬に発生が認められ、以降増加した。7月下旬の発生ほ場率は68.2%、発病株率は2.4%とともに平年より多く、発生量は平年より多かった。

5月下旬に小麦上から採取したヒメトビウンカの幼虫の保毒虫率は簡易ELISA法で9.0%と高かったが、普通期水稲における本田初期のヒメトビウンカの発生量は全般的に平年並であった。

#### (9) その他虫害

イネミズゾウムシ越冬成虫の50%飛翔開始時期は4月第4半旬と推定され、やや早かった。7月下旬の発生ほ場率は31.8%、発生株率は0.4%で発生量は平年よりやや少なかった。

### 3. 果樹

#### (1) カンキツ・そうか病

発生量は、葉では平年よりやや少なかったが、果実は7月から8月に平年より多かった。発生時期は平年並であった。

#### (2) カンキツ・黒点病

発生量は、葉が7月から8月、果実が6月から7月に平年より多かったが、8月以降は少なかった。発生時期は平年よりやや早かった。

#### (3) カンキツ・かいよう病

一部地域の雑柑類で発生を認めた。発生時期は平年より遅かった。

#### (4) カンキツ・ミカンハダニ

発生量は、4月から9月まではやや少なく推移した。発生時期は平年並であった。

#### (5) カンキツ・アブラムシ類

発生量は、5月から6月までやや少なかったが、7月から8月に多くなった。発生時期は平年並であった。

#### (6) モモ・せん孔細菌病

葉での発生時期は、平年並の4月に見られ、6月まで発生量は多かった。果実においても、平年並の7月に発生が見られ、発生量は平年並であった。

#### (7) モモ・モモシンクイガ

被害を認めなかった。

#### (8) モモ・ナシヒメシンクイ

新梢での発生時期はやや遅く、発生量はやや少なく推移したが、9月以降の発生量は平年並となった。

#### (9) モモ・モモノゴマダラノメイガ

被害を認めなかった。

#### (10) ブドウ・晩腐病

発生を認めなかった。

#### (11) ブドウ・べと病

トンネル栽培ピオーネにおいて、6月に平年並の時期に葉で発生を認め、発生量は平年並であった。その後、8、9月に広範囲のほ場で発生を認めたが、発生量はやや少なく推移した。

#### (12) ブドウ・灰色かび病

トンネル栽培ピオーネにおいて、6月に平年並の時期に房で発生を認め、発生量はやや多かった。

#### (13) カキ・炭疽病

7、8月の発生量はやや少ない～平年並であったが、9月の発生量は多かった。

#### (14) カキ・カキノヘタムシガ

6月の発生量はやや多かったが、8、9月の発生量は平年並であった。発生時期は平年と同様であった。

#### (15) カキ・フジコナカイガラムシ

一部産地で4月から発生は平年より早く、発生量も多かったが、8月以降、ほぼ全産地で果実での寄生果率が高くなり、発生量は多く推移した。

#### (16) 果樹共通・カメムシ類

予察灯での誘殺開始時期は平年並であったが、8月以降、誘殺数は多く、9月下旬まで平年値を大きく上回った。被害の発生量は、ナシで多く、カキでやや多かった。

### 4. 野菜

#### (1) キュウリ・べと病

冬春キュウリでは、平年よりやや遅い6月から発生し、発病葉率はやや高かったが、発生面積は平年並で、平年並の発生量であった。

夏キュウリでは、平年同様6月から発生し、やや多い発生量であったが、7月にはやや少ない発生量となった。

秋キュウリでは、平年よりやや遅い9月から発生し、やや多い発生量であった。

#### (2) キュウリ・うどんこ病

冬春キュウリでは、近年小発傾向にある。平年同様6月から発生し、発生面積はやや多かったが、発病葉率は低く、平年並みの発生量であった。

夏キュウリでは、平年同様6月から発生し、平年並の発生量であったが、7月には減少し、やや少ない発生量となった。

秋キュウリでは、発生を認めなかった。

#### (3) キュウリ・褐斑病

冬春キュウリでは、近年は発生を認めない、また

は少発生の年が続いている。本年は発生を認めなかった。

夏キュウリでは、平年同様6月から発生し、平年並の発生量であったが、7月には減少し、やや少ない発生量となった。

秋キュウリでは、発生を認めなかった。

#### (4) キュウリ・アブラムシ類

冬春キュウリでは、平年同様の4月から発生し、その後発生量は大きく増加することなく推移し、やや少ない発生量となった。夏キュウリでは、平年同様6月から発生し、平年並の発生量で推移した。秋キュウリでは平年同様8月から発生し、平年並の発生量で推移した。

#### (5) タマネギ・白色疫病

早生栽培、普通栽培ともに発生を認めなかった。

#### (6) タマネギ・べと病

早生栽培では、平年同様3月から発生し、多い発生量であった。普通栽培では、平年同様4月から発生し、平年並の発生量であった。

#### (7) タマネギ・ネギアザミウマ

早生栽培では、平年同様1月から発生し、発生量は3月にかけて増加し、多い発生量となった。普通栽培では、平年同様2月から発生し、発生量は4月にかけて増加し多い発生量となった。

#### (8) 春レタス・灰色かび病

平年同様3月から発生し、その後発生量は増加せずやや少ない発生量で経過した。

#### (2) 春レタス・菌核病

平年よりやや遅い4月から発生し、発生量はやや少なかった。

#### (3) 春レタス・アブラムシ類

平年よりやや早い3月から発生し、その後発生量は増加せずやや少ない発生量となった。

令和3年度 主要病害虫発生状況(香川県)

単位：ha

作物名 (作付面積) 病害虫名	発生面積	摘 要	作物名 (作付面積) 病害虫名	発生面積	摘 要
<b>早短期水稲 (6,186)</b>			<b>モモ (194)</b>		
葉いもち	687	やや少	せん孔細菌病	194	多
穂いもち	0	やや少	モモシンクイガ	0	並
紋枯病	2,406	並	ナシヒメシンクイ	194	やや少
ばか苗病	0	並	モモノゴマダラノメイガ	0	やや少
もみ枯細菌病	0	やや少	ハダニ類	54	やや少
稲こうじ病	0	やや少	<b>ブドウ (180)</b>		
ニカメイガ	0	並	晩腐病	0	並
セジロウンカ	2,406	やや多	べと病	120	並
トビイロウンカ	0	並	灰色かび病	60	やや多
ヒメトビウンカ	6,186	やや多	<b>カキ (176)</b>		
ツマグロヨコバイ	3,780	やや少	炭疽病	146	多
斑点米カメムシ類	4,468	やや少	カキノヘタムシガ	29	並
コブノメイガ	344	並	フジコナカイガラムシ	108	多
イネミズゾウムシ	4,124	少	<b>冬春キュウリ (14)</b>		
<b>普通期水稲 (5,421)</b>			べと病	4	並
葉いもち	5,191	やや多	うどんこ病	2	並
穂いもち	4,153	やや多	褐斑病	0	やや少
紋枯病	3,374	並	アブラムシ類	7	やや少
ばか苗病	0	並	ミナミキイロアザミウマ	9	多
もみ枯細菌病	0	やや少	<b>夏秋キュウリ (79)</b>		
稲こうじ病	520	やや多	べと病	42	並
ニカメイガ	0	並	うどんこ病	2	やや少
セジロウンカ	4,153	並	褐斑病	30	やや少
トビイロウンカ	0	やや少	アブラムシ類	65	並
ヒメトビウンカ	5,710	やや多	ミナミキイロアザミウマ	63	やや多
ツマグロヨコバイ	3,634	並	<b>タマネギ (224)</b>		
斑点米カメムシ類	4,672	並	白色疫病	0	やや少
コブノメイガ	2,595	やや少	べと病	64	やや多
イネミズゾウムシ	1,817	やや少	ネギアザミウマ	224	多
<b>ムギ類 (2,979)</b>			<b>春レタス (129)</b>		
うどんこ病	0	並	灰色かび病	16	やや少
赤かび病	91	並	菌核病	16	やや少
<b>かんきつ (1,396)</b>			アブラムシ類	16	やや少
そうか病	241	多	ヨトウガ	0	並
黒点病	598	並	ハスモンヨトウ	0	並
かいよう病	47	並	<b>きく (44)</b>		
ミカンハダニ	140	やや少	白さび病	13	やや多
アブラムシ類	792	多	アブラムシ類	6	やや多
<b>なし (38)</b>			アザミウマ類	15	やや少
黒斑病	0	並			
黒星病	0	並			